

全盲のドラマーが学校で授業

11月10日、杉並区立杉並第七小学校では、プロドラマー佐藤尋宣（さとうひろのり・35歳）さんによる授業が行われました。佐藤さんは、大学時代に視力を失いましたが、好きな音楽を続けプロのドラマーとして活動しています。小学4年生50名とのふれあいや演奏などを通じ、障害者を可哀想な人だとか特別な人として見るのではなく、お互いのできないことを理解して、尊敬・尊重できる関係を作りたいと話しました。

この日、杉並第七小学校では、4年生50名を対象に、「共に生きるを考える」をテーマに授業が行われました。その授業の講師を務めたのが佐藤さんです。佐藤さんは、生まれた時から、網膜色素変性症による弱視で、小学6年生の頃にはマジックでノートを取って、それがようやく見える程度だったそうです。その当時、年々視力が落ちていたことや家族からも病気のことを聞いて、いつかは視力がなくなる日が来ることをなんとなく覚悟していたそうです。

ドラムとの出会いは、生まれ故郷の宮城県での高校1年生の時でした。友達から誘われバンドに参加。人気のギターやボーカルはもう決まっていて、残っていたのはドラムのみ。しかし、そのドラムを叩いてみると、その面白さや奥の深さにはまってしまい、無心でドラムを叩く日が続きました。



大阪の大学に入学して、ますますバンド活動に力を注ぎました。そんな中、かすかに残っていた視力が、気が付くとまったく見えないことに気がきました。佐藤さんも小学生時代から、なんとなく覚悟していたその時が来たことに、大きなショックを受けました。これからの自分はどうしていけばいいのか、不安がないと言えば嘘になります。しかし、その不安も3日ほどだけで立ち直ることができました。そこには、それまでの何も変わらない先輩や友人、音楽仲間の存在があったからです。佐藤さんが視力を失ったことを伝えても、特に特別扱いもなく接してくれたことで、佐藤さんも自分は自分なのだと思うことができました。

4年生50人を前に、「質問をどうぞ」「聞きにくいことこそ必ず聞いてください」と佐藤さん。小学生からの「一人で歩いていて、人とぶつかったりしませんか」「目が見えたら何をしたいですか」「困ることはありますか」など、様々な質問に一つずつ丁寧に答えました。佐藤さんが、子どもたちに話します。「障害者は、たいへんことはあります。でも障害者は可哀想な人ではありません。障害者はいろいろ工夫をしながら、毎日楽しく暮らしています。そして、今日のように身近にふれあうことで、お互いを認め合うことがとても大事で、そのことは学校や社会からのいじめを無くすことにつながります。」と話しました。

【報道機関 問い合わせ先】

杉並第七小学校：電話 3392-6328